

本書は、構音訓練のさまざまな「音」を記録するときの書き方や伝え方について解説しています。「音」を書き留めることは構音訓練の日々の記録に欠かせないからです。書き分けた方がいいポイントはおさえながら、しかも、過剰な精密さととらわれない程度の適度な幅があるような解説を心がけています。

構音障害の臨床では、なんらかの要因で目標となる音が適正に産出されない現象をしっかりと観察し、その要因を考察します。そして、どういったら可能な適正音が出せるのか考え、具体的な手立てを講じます。話しことばの明瞭度を上げて、異常度を下げることによって、伝わりやすい状態にすることが目標となります。周囲の人と音の出し方が多少違っていても、その方の生活に支障がないのであれば、あえて構音訓練を行う必要はないと思いますが、その方にあったアプローチによって、話しことばが相手に伝わりやすくなることも実際に多くあります。構音訓練を行う場合は、その方の出している音をよく観察して、目標となる音に近づくように働きかけるわけですが、こうした日々の臨床での立案・実施・評価（PLAN-DO-SEE）を記録するときに、さまざまな「音」を記述します。それから私たちは、受け持ちのケースを別の機関につなぐために紹介状や申し送りのレポートを書くことがあります。また、経験したことをまとめて、勉強会や学会などで報告することもあります。読み手のみなさんに伝わるように「音」を記述するのは大切なことです。

本書の作成に先立ち、ST仲間や、「きこえとことばの教室」の先生方に対して、構音訓練の記録の書き方について、迷っていること、知りたいと思っていることなどアンケートや聞き取りで尋ねてまわり、情報を集めました。基本的な記号の使い方を理解したいということと、実際のレポートなどの書き方や伝え方を学びたいといった意見が多く寄せられました。そこで、できるだけそうした質問・意見に応える内容になるよう資料を集めました。

用語や概念についての質問の中には、すっきりと解説できるものもありましたが、複数の考え方があって簡単に答えることができない難しいものもありました。

そうした立場の違いなどを含めた解説をするために、3人の架空の人物に登場してもらい、随所で会話をしながら、問題解決していく形をとることにしました。1人は、構音訓練の記録の書き方について、あれこれ考え続けているSTのT先生です。山の庵に住んでいて、鳥の声を聞き、ウサギなど小動物を眺めながら暮らしています。そんなT先生のところに、基本的なことを学びたいという2人の人物、Aさん、Bさんが尋ねてくることにしました。この3人に、本書で伝えたいことの多くを託して語ってもらっています。本書は3つの章で構成されていますが、各章の本文に入る前に3人がいろいろな話をします。また解説の途中で、疑問に思ったことを質問し、そこでまた議論する場面もあります。音声や音素の研究にはいろいろな立場があり、一つの説明だけにすると、偏りそうな項目は特に、3人それぞれが課題意識を持つようなコメントにしました。

第1章は、構音障害に関連した「音」を記述するときの基礎知識を26項目のQ&Aとしてまとめました。構音障害の学習をするときによく質問されることをたくさん取り入れました。音声学と構音障害の臨床で使われる用語の中には、同じ用語でも意味が違う場合がありますので、その違いについても解説しています。

それから、「音声」を表記することと「音素」を表記することの使い分けにつながるような設問も用意しました。特に「音素」については研究の変遷があり、主張の違いも多く私たちSTにとって理解しにくいところがあります。このハンドブックの目的は、記号の使い方や記録の書き方ですが、音素に言及するにあたっては、そもそも「音素」について知る必要があります。音素は単独で取り出すことができるものではなく、同じ体系の他の音素と相互対立したものだといいます。単音と似ているところもあり

ますが、異なる概念です。構音障害だけでなく言語発達の遅れが見られる子どもたち、ディスレキシアの子どもたちを理解して支援を考えるためにも、「音素体系」「音韻処理」といった概念を理解する必要があります。STにとってしっかり学んでいきたい概念です。本書では、音韻論の専門的な考え方にまでは言及できていませんが、関連した話題を取り入れています。ぜひ興味を持って音韻論の扉をたたいていただきたいと思います。

第2章は「こんなときどう書く？ 現場で取り組む日々の記録」という内容です。3つのタイプのレポートを通して解説しています。まずレポートAは、構音訓練の場面特有の音を取り上げ、その書き方について解説しています。次のレポートBは、初回面接をした人がどのような結果だったのか、ケース会議で報告してそれを簡潔に書き取るという設定にしました。小児分野で、よく遭遇するタイプの構音障害を9つ、モデルケースとして挙げました。どのように書くことができるのか、それによって何がわかるのか、立案・実施・評価（PLAN-DO-SEE）の視点に立って解説しています。記録を元に、質疑応答することでアプローチポイントを見つけていく様子は、実際のケース検討と重なる場面として3人の会話という形で表現しました。最後のレポートCは、「系統的構音訓練の各段階のまとめ方」という内容です。構音訓練のスタートから終了までの大まかな流れをつかみ、その各段階で音をどのように書いていくか見ていきましょう。

第3章では、「臨床に役立つ7つのエピソード」を紹介しています。これらは、産出者本人が自分の音声をどのように語音として音韻処理しているのかについて考察する手がかりを与えてくれた発話エピソードです。エピソードを丁寧に分析することは、臨床推論（クリニカルリーズニング）につながります。臨床推論とは、「当該患者の疾病を明らかにし、解決しようとする際の思考過程や内容」のことです。音声学の知識に加え、音韻論的な知識を持つことで、構音障害の背景が解明され、手立ての発見につながり

ます。ケース会議など議論したり、自分の記録を見直しながら、次回のセッションを立案したりするなかで、この臨床推論の力が鍛えられていくように思います。構音訓練中にふとつぶやかれた発話エピソードを丁寧にみていくことがどれほど大切か、読み取って下さい。

付録として、訓練に使用できるミニマル・ペアの教材や、簡単な評価表の作り方などを載せていますのでぜひご活用下さい。

このように本書は、構音訓練で「音」を記録するときに、「音声表記」と「音素表記」の違いを理解して書き分けることを提案しています。もしも、今まであまり意識せずに両者を混在して使ってきたという方や、仮字文字ばかりで「音」を書いていたという方はぜひその違いを意識するようにして下さい。そうすることで、音声的誤り (Phonetic error) や、音韻的誤り (Phonemic error) という視点の違いが整理されると思います。それは、アプローチの引き出しを増やすことに役立ちます。

どうか、「記号」と上手につきあい、使い分けを意識しつつ、しかもとらわれすぎずに、日々の記録に取り組んで下さい。柔軟な発想で、相手の方に対する効果的なアプローチを見つけて下さい。音声学や音韻論に親しみ研究と臨床の間で対話が進むよう、一緒に学んでいきましょう。

**Aさん** こんにちは、T先生。私は臨床3年目の言語聴覚士（以下、ST）です。構音障害を担当することが多く、検査や日々の記録で音について書くことがたくさんあります。

学生の頃、音声を表すときは記号を[ ]で、音素を表すときは記号を / /で囲むように、と習いました。そのときはわかったように思いましたが、でも、実際にどれを音声記号として書けばいいのかな、この記号は音素として書いていいのかなと悩むことがあります。もう一度、基本的なことから教えて下さい。

**Bさん** 私は、小学校の教師です。教員歴は15年です。今年度から、「きこえとことばの教室」を担当することになりました。「構音」の相談もたくさんあります。とにかく、構音障害の本を読んで勉強しながら対応しています。歴代の先生たちから受け継がれたノウハウもあり、教室には、教材もたくさんあります。悩んだときはすぐに教えてもらえる環境で助かっていますが、構音や言語発達の指導に取り組むには、私自身が、音声や音素についての知識をもっと深める必要があると感じています。音声学のテキストと構音障害のテキストでは、似ている用語が違う現象に用いられる場合もあって戸惑っています。すでに現場にいますので、明日会う子どもたちのために、すぐに役立つような実践的な勉強をしたいと思っています。

**T先生** わかりました。Aさんの言った音声表記は[ ]、音素表記は / / という決まりごとは、いろいろな本に書かれています。私たちは、この決まりごとをもとにした使い分けについて、構音訓練の記録を書くための、一緒に考えていきましょう。実際に出た音は「音声」、目標音は「音素」というように分けている人も多いようです。

**Aさん** え？ 私は、そうしていました。今から出す音、つまり目標音は、まだ実現していないから音素だと思って、 / /で囲んでいます。たとえば、「サ」が「タ」に置き換わっていたケースは、「目標音 /sa/ に対して、実現した音声は [ta]」と書いています。いかがですか？

**T先生** Aさんは、「これから出そうとする音」のことを目標音と考え、それが音素と考えているのですね。音素は、目標音のことではありません。

**Aさん** 音素は、抽象的で頭の中にあるものと理解していたので、てっきり、これから出そうとする音のことだと思っていました。

**T先生** では、Aさん。これから出そうとする目標音を音声記号で書いて、「目標音 [sa] が実際には [ta] になった」と書くのは、おかしいですか？

**Aさん** そういわれると、目標音を音声記号で書いてもおかしくないですね。「これから出そうとする音」が音素で、「実現した音」が音声という分け方のどこが問題ですか？

**T先生** ある音素の音声的实现はこうなります、という表現は可能です。だからといって「音素とは、これから出そうとする音のことだ」ととらえてしまうのは問題です。「音素」か「音声」かの区別を、出す前か、出した後か、とするのは間違いです。

**Aさん** では、訓練などで「これから出そうとする音」は目標音と考えるところまではいいですか？

**T先生** はい。日々の構音訓練では、目標音の設定をします。目標音は、その都度、出してもらおうとしている音です。でも、目標音は、音素ではありません。音素とは、「意味の区別に関わる言語の単位」のことです。音素を扱うのは音素論（音韻論）という分野です。意味の区別に関わるということが、音素の極めて重要な働きといえます。言い方を変えれば、音素は「意味を区別する働きのない音をひとまとめにしたもの」です。Aさんは、そもそもどうして目標音と音素が同じだと思ったのですか？

**Aさん** 私がこれまで、目標音と音素を同じように思い込んでいたのは、日本語の /s/ について、/s/ → [s]/\_a,u,e,o /s/ → [ç]/\_i と書いてあるのを参考にしたからです。これは、左に音素、→の右に実現した音、スラッシュとアンダーバーで、どの音の前かという音環境を示しているの